アメリカの朝鮮戦争
勃発の歴史歪曲策動

アメリカの朝鮮戦争勃発の歴史歪曲策動

元 明 郁
金 学 哲

朝鮮・平壌
外国文出版社
チュチェ92（2003）

目　次

出版に際して

アメリカは、朝鮮戦争勃発 50 周年に当たる 2000 年 6 月 25 日から 2003 年にかけて、朝鮮戦争の歴史を歪曲宣伝するキャンペーンを大々的に繰り広げている。

その裏面には、戦争犯罪人、侵略者としての責任を朝鮮民主主義人民共和国に転嫁しようとする、下心がある。

アメリカは戦争前、朝鮮人民軍が「南征」の目的で組織されたかのように宣伝し、「南伐」だの「人民軍南下」だのといった妖言を大々的に流し、挑発的な 38 度線衝突事件を起こすたびに、尊厳ある朝鮮民主主義人民共和国の名と結びつけて歪曲宣伝した。そして朝鮮戦争後、数十年が過ぎ去った今日までも、機会あるごとにその真相を歪曲宣伝して､共和国の権威を失墜させせようと狂奔している。

元来、1953 年 7 月 27 日に締結された朝鮮停戦協定には、停戦後 3 ヵ月以内に双方の一級高位の政治会議を招集して、朝鮮からのすべての外国軍隊の撤退及び朝鮮問題の平和的解決のための措置を協議することになっている。しかしアメリカは、今日までも停戦協定をみだりに違反して、それを平和協定に替えるという朝鮮民主主義人民共和国（以下、共和国）の提案を受け入れていない。

アメリカが、朝鮮戦争の法的終結を意味する平和協定の締結に応じないのは、なんとしても再度北侵を実現して、全朝鮮を植民地にしようとする野望を抱いているからである。

アメリカが平和協定の締結に応じないいま一つの理由は、朝鮮戦

争を起こした者としての責任を免れないということを認知しているからである。

そのため、アメリカは、朝鮮戦争の法的終結において有利な地位を占めることを前提として、朝鮮戦争勃発の責任を共和国に転嫁するための謀略策動を執拗につづけており、アメリカ式の論理にもとづき「勝利者」の姿勢で戦争を締めくくろうと血眼になっている。

第 2 次大戦後、世界の至る所に設けられた米軍事基地が、反米自主化闘争によって撤廃されているのは、一つの趨勢となっている。

1980 年代の後半から、スペイン、ギリシア、フィリピン、パナマなどに設置されていた米軍事基地が撤廃を余儀なくされている。

朝鮮においても米軍を撤収させる闘争が強力に展開されている。しかし、アメリカは南朝鮮を自己の侵略基地として確保して北侵を実現し、日本、中国、ロシアを牽制するため、是が非でも南朝鮮に居座りつづけようとしている。

歴史的にアメリカは、戦争前には、朝鮮人民軍の「南征」を口実に撤収延期策を用い、戦後には、北朝鮮が「南侵」して南朝鮮を「赤化」しようとするので、南朝鮮の「要請」によりそれを防ぐために居残っているのだと弁明してきた。

1975 年の第 30 回国連総会では、南朝鮮駐屯米軍の撤収に関する決議が採択され、1990 年代初には冷戦が終結し、1991 年 12 月には「北南間の和解と不可侵及び協力・交流に関する合意書」が、2000 年 6 月 15 日には北南間の共同宣言が採択されて米軍の南朝鮮駐留の口実がなくなったのにもかかわらず、アメリカは依然として「核問題」、「ミサイル問題」にこじつけ、米軍の南朝鮮占領を永久化しようと必死になっている。

注目されるのは、6 ・ 25 の時のように共和国の「南侵」が懸念

されるので、南朝鮮に米軍を引きつづき駐屯させているとし、朝鮮戦争勃発の歴史を歪曲する策動をさらに強化していることである。

アメリカは、いかなる手段と方法を用いても、朝鮮戦争を起こした者としての正体を隠し、その責任を共和国に転嫁して、米軍の永久占領を合理化しようとしている。

アメリカは、米軍の南朝鮮永久占領だけでなく、第 2 の朝鮮戦争の準備と開始を合理化するためにも、6 ・ 25「南侵」説を立証するための謀略にすがりついている。

第 2 の朝鮮戦争を対朝鮮政策としているアメリカは、その準備と開始を合理化する口実として 6 ・ 25 の時の「南侵」説が説得力を持つと断定し、その目的を達成するために朝鮮戦争勃発の歴史を歪曲する策動をつづけているのである。

アメリカによる朝鮮戦争勃発の歴史歪曲策動の真相を明らかにすることは、朝鮮半島における新たな戦争の防止と平和保障にとって大きな意義を有するとみなし、この図書を出版するものである。

Ⅰ　朝鮮戦争開始以前、その責任を共和国に転嫁するためのアメリカの謀略

アメリカは、朝鮮戦争の目的を成功裏に達成しながらも、その侵略行為を正当化するための謀略に大きな意義を付与し、それを朝鮮戦争開始以前から計画的に準備した。

そうした謀略によって「合理」的な戦争開始の手口が選択され、「南侵」に対する世論化と類例のない欺瞞・偽装工作、戦争開始と同時に国連に提出する決議案が巧妙に準備された。

1　一挙両得を狙った「2 段階戦争論」の選択

第 2 次大戦後、狡猾な新植民地主義政策を追求してきたアメリカは、海外侵略においても「2 段階戦争論」、「代理戦争論」を提唱し、その最初の実験として朝鮮戦争を引き起こした。

「2 段階戦争論」、「代理戦争論」は本質上、追随諸国に戦争をしかけさせ、自分自身は「援助者」、「支援者」に扮して戦争に介入することで、戦争犯罪人、侵略者の正体を隠し、その結果を独り占めしようとする、一挙両得の戦争手法である。

朝鮮戦争においてアメリカは「2 段階戦争論」にもとづき、傀儡李承晩（リスンマン）一味を指嗾（しそう）して戦争を起こさせ、自分自身は国連の名を盗用して参戦することで、戦争犯罪人の正体を隠し、侵略目的を容易に達成しようと狡猾に策動した。

アメリカのこうした陰険な意図は、トルーマンの特使として戦争開始直前に南朝鮮にやってきた、ダレスの言動によって暴露された。

1950 年 6 月 17 日、南朝鮮軍がたむろする 38 度線の陣地まで視察したダレスは、ソウルの「半島ホテル」にあるアメリカ大使館で、「北進」狂信者の李承晩、申性模などと密談し、「北伐」計画を確定した後、「北朝鮮に対する攻撃を開始」する指令を与え、「もし 2 週間だけもちこたえるならば、その間にアメリカは、北韓が南韓を攻撃したと提訴し、国連をしてその名で陸・海・空軍を動員」（日本の図書『勝利なき戦争』　29 ページ）するだろう、とうそぶいた。

アメリカの出版物が「アメリカの戦略は、かれらのかいらいが敗走させられて、そこでアメリカに侵略の口実をあたえてくれるという冷静な計算で、たたかいをはじめたらしい」（アメリカの図書『朝鮮戦争の歴史』上　日本語版　109 ページ）と評し、マッカーサー司令部の参謀本部から駐イラン米軍事顧問団に異動したエイダ大佐が 1950 年 12 月、イラン軍参謀との談合の席上で「アメリカの計画は、李承晩軍の直接の参加と米陸・海軍の援助によって、朝鮮の 38 度線以北の地域を占領することであった。……」（インドの新聞『クロス・ロード』　1950 年 12 月 22 日付）と言ったのは、アメリカの「2 段階戦争論」の内幕をすっぱぬいたものである。

アメリカは、このような戦争開始手口の要求にかなうよう、1949 年に立てた「北伐」軍事戦略計画も修正、補足した。既成の軍事戦略計画では、朝鮮の東西両海岸からの上陸と並行して地上攻撃をおこなうことになっていたが、これでは「2 段階戦争論」の追求する目的を達成することは不可能だった。

それで 1950 年に入って、「朝鮮の東部及び西部海岸に軍隊を上陸させようとしたアメリカの計画は、6 月 25 日の軍事作戦開始以前

に撤回され、38 度線突破計画に集中」(インドの新聞『クロス・ロード』　1950 年 12 月 22 日付)するよう修正されたのである。

一方、アメリカは、傀儡李承晩一味を内乱開始の先頭に立たせるため、彼らに戦争熱気を吹き込み、戦争へとあおり立てた。

諸般の事実は、アメリカの「2 段階戦争論」が、戦争勃発の責任を共和国に転嫁するために選択された、陰険きわまる戦争開始手口であることを実証している。

2　戦争開始以前に繰り広げた「南征」、「南伐」のデマ宣伝

アメリカは北侵を目的に、戦争前から朝鮮人民軍の「南征」、「南伐」といったデマをしきりに飛ばした。

これは、戦争前から「南征」、「南伐」説を内外に流布すれば、戦争を引き起こした後にもそれを口実に共和国にその責任を転嫁することができると考えたからである。

このような企図から戦争前にアメリカは、機会あるごとに傀儡李承晩一味に「韓国が先に攻撃を受けたということを、世界が認識するようにする必要性」(アメリカの図書『朝鮮戦争――回答のない質問』　44～45 ページ)を力説して、「南征」、「南伐」のデマを盛んに飛ばした。

アメリカと傀儡李承晩一味は、1948 年 2 月に朝鮮人民軍が正規武力になったときにも「南征」を云々し、日本帝国主義の敗亡後、南朝鮮を占領した米軍の「撤退延期」策動を繰り広げたときにも「南伐」だの「人民軍の南下」だのといったデマを大々的に流した。戦争直前に北から「今すぐ攻撃されるような現実的な兆候はない」(南朝鮮の図書『駐韓米軍 30 年』　137 ページ)、「6 月 17 日には米国

務長官ダレスが『訪韓』、38 度線を視察したが、何の異常も発見できずに帰った」（同上）などと、北からの「南侵」の兆候はまったくないという実地資料が提出されていたが、アメリカと傀儡李承晩一味は戦争開始の日が近づくにつれ、「南伐」に関するデマ宣伝にいっそう熱を上げた。

こうすることによってアメリカは、戦争前に南朝鮮社会に「南伐」の流言をはびこらせようとした。

3　戦争の序曲——38 度線衝突事件

アメリカは、38 度線の境界線を引いて以来、38 度線衝突事件を頻繁に起こした。傀儡李承晩一味は、戦争を開始するまで、南朝鮮駐屯米軍事顧問団の指揮下に、延べ 8 万 4,000 名余りの兵力を動員して 5,150 余回にわたり、38 度線一帯で武装挑発を繰り返した。このことについて 1949 年 10 月、南朝鮮陸軍司令部の会議室で開かれた師団長会議の席上、米軍事顧問団団長ロバートは、「確かに 38 度線以北地域に対する攻撃の多くは、私の命令によって遂行され、また、これからもさらに多くの攻撃がなされるはずだ。しかしながら、多くの場合、部隊は自分勝手に攻撃し、何の成果もなく莫大な量の弾薬を消耗したうえに、致命的な損害を被った。……今後、38 度線以北地域に対する国防軍の進攻は、米軍事使節団の命令によってのみ遂行されねばならない」（日本の図書『アメリカ敗れたり』14 ページ）と述べている。

そのため、多くの外信は、戦争前にアメリカと傀儡李承晩一味が起こした 38 度線衝突事件を「小さな戦争」と評したのである。

アメリカと傀儡李承晩一味は、38 度線衝突事件を、「内戦のため

の格好の実験台」、「敵とじかに接触して、実戦能力を高める演習」とみなし、「北伐」計画の実現に有利な高地、地域を占領して、攻撃出発位置を改善する契機に利用した。

アメリカと傀儡李承晩一味が 38 度線衝突事件を起こした主な目的は、それが「北の赤化統一政策」によって起きたかのように歪曲して大々的に宣伝することによって、戦争の準備を全面的に進め、戦争を起こしてからは、その責任を共和国に転嫁する口実を前もって作っておくことにあった。

こうした目的から、アメリカと傀儡李承晩一味は、南朝鮮軍を「北朝鮮軍」に変装させて 38 度線で銃声を上げさせ、それを「北朝鮮軍の奇襲」と偽る芝居を演じることもはばからなかったのである。

事実上、彼らが起こした 38 度線衝突事件は、朝鮮戦争の「前奏曲」であり、事後、朝鮮戦争勃発の責任を共和国に転嫁する術策の一つであった。

4　戦争前夜の欺瞞・偽装工作の内幕

アメリカは朝鮮戦争を起こす際にも、不意を狙うとともに、戦争勃発の責任を共和国に転嫁するのに有利な条件を取りつける目的で、欺瞞策を弄した。

朝鮮戦争前夜の欺瞞・偽装工作に大きな意義を付与したアメリカは、1950 年度に入ってからまず、自分たちはあたかも朝鮮半島には関心がないかのように見せかけるため、狡猾にも「アメリカの極東防衛線」に関するデマをまきちらした。

それは、米上院外交委員会委員長のコナリーが 1950 年 1 月初め、朝鮮半島はアメリカの「防衛最前線」ではないとの談話を発表し、

それから数日後の同月 12 日、米国務長官アチソンが「政策声明」を発表した直後から積極化された。
米国務長官アチソンは、ワシントンにあるナショナル・プレスクラブの昼食会に招かれておこなった演説で、「アメリカの極東防衛線は、アリューシャン列島から日本本州を経て琉球諸島を結ぶものである。われわれは琉球に重要な防御施設を擁しており、それをひきつづき維持するであろう。防衛線は琉球からさらにフィリピンに伸びている。……上記の防衛線の外に位置する国の安全、また軍事的攻撃については保障する者がない」（南朝鮮の図書『韓国外交秘録』　ソウル新聞社　1964 年　210～211 ページ）と述べている。
この声明の発表後、アメリカはマスメディアを通じて、南朝鮮が「アメリカの保護の外にある」ことを大々的に宣伝した。
だが、「アメリカの極東防衛線」が朝鮮侵略戦争のための欺瞞術策にすぎなかったことは、その後の彼らの動きそのものが如実に物語っている。
アメリカは、「アメリカの極東防衛線」についての政策声明を発表した直後、朝鮮戦争が勃発した場合にとるべき「特別行動」に関する「ＮＳＣ――68」戦略計画を立てた。この計画は、1950 年 1 月、米大統領トルーマンの指示にもとづき、米国務省と米統合参謀本部の連合会議で作成され、4 月 2 日、米国家安全保障会議で承認された朝鮮戦争に関するものであった（『ニューヨーク・タイムズ』1964 年 4 月 13 日付）。
アメリカは 1950 年 1 月 26 日には、傀儡李承晩一味との間に「韓米相互防衛・援助協定」と「駐韓米軍事顧問団設置に関する協定」を締結し、2 月には、李承晩を東京に呼んでマッカーサーと北侵について合意させ、より多くの軍事援助を約束した。

1950 年 4 月 3 日に米国務省が公開した李承晩の特使張勉（チャンミョン）と米極東担当国務次官補ディーン・ラスクの対話で、ラスクが「アメリカは過去と同様、現在においても韓国に相当な物質的援助と政治的支持を与えている事実に照らして、アメリカが大韓民国をその敵に手放したという推論は根拠のないものと思う」（南朝鮮の図書『韓国外交秘録』　1964 年　212 ページ）と吐露したことは、「アメリカの極東防衛線」の宣伝が朝鮮戦争を起こす行為を隠蔽するための煙幕であったことを実証している。

朝鮮戦争を控えて、アメリカと傀儡李承晩一味は「奇怪な沈黙」の術策も弄した。

彼らは、1950 年に入って「5、6 月危機」説を流し、大々的な「北伐」騒動を起こした。そのため、国内外で朝鮮戦争勃発を憂慮する声が高まった。彼らは、こうした状況下で戦争を起こせば、不利を招くと考え、「沈黙」の術策を弄したのである。

この術策は、「北伐」騒動を起こさずに不意に北侵すれば、その責任を北に転嫁し、アメリカが介入する口実をつくることができるので、騒ぎ立てずに時を待つのが賢明だ、というアメリカの指令により傀儡李承晩一味が考案したものである。

1950 年 5 月 10 日、アメリカの教唆のもとに申性模をはじめ南朝鮮の傀儡たちは、「……南侵の危険が迫っている」（『ニューヨーク・タイムズ』　1950 年 5 月 11 日付）とし、記者会見やラジオを通じて「北伐」を唱えていたが、5 月 11 日から 40 日余りの間、出版・報道管制を実施した。

この事実を反映して、アメリカの図書『朝鮮戦争の歴史』上（日本語版　101 ページ）は「『朝の静かな国』といわれるこの国の地上と地下でおこなわれている諸事件のなかに、情勢の特別な変化を反

映する一つの事件があった。北からの侵略の予想についての国防相の5月10日の警告のあとで、新聞ならびに政治家によるそのような談話の完全な停止がおこなわれたのである」と書いており、アメリカの図書『秘史朝鮮戦争』（日本語版　56ページ）は「1950年5月11日以後は、しめしあわせたように、韓国政府もこのような危険と自己の装備の周知の不足について、沈黙を守った」と評している。

「沈黙」の術策は、アメリカと傀儡李承晩一味の思惑とは逆に内外の疑惑を招いた。

当時、南朝鮮の好戦的な「北進」騒ぎに耳なれていた西側の記者たちは、それを「ソウルの沈黙」、5、6月の南朝鮮を「静かな国」と描写し、突然の「沈黙」に疑惑を抱いた。

日本の図書『朝鮮戦争』（洞富雄　22ページ）が「『もっとも危険なとき』であると断じた時期に『韓国』政府が４０日間にもわたって沈黙してしまっていたのは、どう解釈したらよいのであろうか。これはなんとも不思議な話である」と評したのは、アメリカと傀儡李承晩一味の「沈黙」の術策が陰険な目的を追求していたことを暴露している。

アメリカと傀儡李承晩一味は、戦争前夜に週末休暇、旅行、夕食会などの名目で高官たちを出払わせて、朝鮮戦争犯罪人の正体を覆い隠そうとした。

朝鮮戦争を直接主導した米大統領トルーマンは、1950年6月24日に週末休暇をとってミズーリ州の故郷を訪れ、米国務長官アチソンも同じく週末休暇にメリーランド付近の自分の農場を訪ねた。また、ダレスは6月24日に週末旅行に、米陸軍長官フランク・フェイスと米極東担当国務次官補ラスクはジョージタウンのある家の夕食会に招かれ、南朝鮮駐屯米軍事顧問団団長ロバートは本国に召還

され、参謀長ライトは旅行に出た。
　だが、その裏でアメリカは、朝鮮戦争の開始を予見して指揮に万全を期すため、極東軍司令官マッカーサーと参謀長アモンドをはじめ同司令部の参謀たちに、それぞれの位置を占めて待機するよう、特別命令を下していた。
　さらに、「東京 4 者会談」に参加した国防長官ジョンソンと統合参謀本部議長ブラッドリーを 6 月 24 日までにワシントンに到着させ、休日（6 月 25 日）であるにもかかわらず 30 人の国務省職員を出勤させた。
　これは、アメリカが事前に戦争の作戦・指揮系統を確立したことを意味しており、高官たちを出払わせた目的が何であったかを物語っている。
　戦争前夜のこうしたアメリカの二面策動は、社会各界に大きな疑惑を抱かせた。アメリカの図書『朝鮮戦争――回答のない質問』（14 ページ）が「戦争の前夜に、米国の立場を代弁すべき大統領と国務長官が二人とも外出していたのである。国務省に集まった中堅級官吏は、政策の作成者ではなく、長官クラスの命令を実行する人たちにすぎなかった。のちに米国は、これを驚くべき意外な出来事であったとしている。しかし、かれらの初期の行動には、たしかに陰謀のにおいがするのである」としているのは、戦争前夜のアメリカの偽りの動きを見透かしてその内幕を明かしている。
　アメリカの筋書きどおりに、傀儡李承晩一味も開戦前夜に、非常戒厳令の解除、外出・外泊の許可、夕食会の催しなど、戦争犯罪人としての正体を隠すための欺瞞・偽装工作をおこなった。傀儡李承晩一味は、1950 年 6 月初めから布いてきた非常戒厳令を開戦前日の 6 月 24 日零時を期して解除するとともに、外出、外泊、休暇を

許可する芝居を打った。

また、陸軍本部構内に新設された将校クラブの落成式を開戦前日の 6 月 24 日夕方に催し、第 1 線地区の指揮官や陸軍本部の要人がこれに参加したというデマを流した。このような傀儡李承晩一味の動きについて、日本の図書『朝鮮戦争』（洞富雄　29 ページ）では、「韓国側が一時的にせよ戒厳令を解除する余裕を持ったのは、先制攻撃を準備するためであった」と明かしている。

それに、南朝鮮の雑誌『思想界』（1965 年 6 月号）までも、当時 38 度線に配備されていた南朝鮮軍第 8 歩兵師団長の李成嘉（リソンガ）が、「在京部隊内ではそうだったか知りませんが、第 1 線の師団長だった私は当時非常事態下にありました。外出も禁じられ、6 月 25 日の早暁からそのまま戦闘に入りました」と証言したことや、当時ある南朝鮮軍将校が、「6 月 24 日はせっかくの土曜日であったにもかかわらず前方将校の外出は禁じられ、戦闘命令に備えて待機せよとの伝達があった。24 日の晩、陸軍部隊は 25 日の明け方を期して 38 度線を突破し、北朝鮮に対する軍事行動を開始せよとの秘密命令を受けた」と語ったことを公開している事実は、アメリカと傀儡李承晩一味が、計画どおりに北侵攻撃を推進し、その実現に煙幕を張るために、戦争前夜に狡猾な欺瞞・偽装工作をおこなったことを実証している。

欺瞞・偽装工作の幕裏で、万端の準備を整えたアメリカと傀儡李承晩一味は、1950 年 6 月 25 日の早暁、突如北侵を強行したのである。

5　戦争開始に先立って起草した国連決議案

第 2 次大戦後、世界制覇の野望の実現に国連の名を盗用するのを一つの手段とみなしたアメリカは、「国連臨時朝鮮委員団」を南朝

鮮に送り込んで、植民地従属化政策をいっそう執拗に追求した。
アメリカは朝鮮戦争を画策する際、国連の名を盗用して戦争に介入し、追随諸国の軍隊をも参戦させる奸計を企む一方、「北朝鮮が先に侵入したという逆宣伝とともに、北朝鮮に対する攻撃を開始」（日本の図書『アメリカ敗れたり』 16 ページ）し、国連に上程して戦争勃発の責任を共和国に転嫁しようとした。
こうした企図にもとづき、米国務省政治安全保障審議室では、「北朝鮮の攻撃」を提訴するための謀略文書である国連決議案をあらかじめ起草した。
この事実は、朝鮮戦争が起こってからほぼ 1 年後の 1951 年 6 月 5 日、米上院歳出委員会の国務省予算に関する実務的な聴聞のときに暴露された。
聴聞会でファーガソン議員の質問に国連担当の国務次官補ジョン・D・ヒッカーソンは、「決議案の骨子だけは作っておきました。……それは過去の侵略の例を参考にしたものでした。こういう場合にまずやることは、相手方に対し、侵略をやめてもとの位置にもどれということです。たしかにわれわれはその大綱をきめてはおきましたが、ごく大ざっぱな輪郭だけだったのです」（アメリカの図書『秘史朝鮮戦争』 日本語版 68～69 ページ）と答弁した。「証言の冒頭で国務次官補は、攻撃が事前の『警告なしに』やってきたと無条件に主張した。終わりになって、彼は警告をうけ、準備を討議し、国連に提出するための『決議案の骨子』を起草しておいたことを告白した」（同上 68 ページ）。アメリカが国連に提出する「決議案の骨子」をあらかじめ起草しておいたことが暴露されると、「普通なら先見の明があった証拠として、国務省が自慢して然るべきこのような準備を明らかにしたがらないところをみると、どうやらほ

かにもまだ、かくされた事実があったのではないかと疑いたくなる」（同上　68〜69 ページ）と言論界の疑惑を惹起させた。

そのうえ、アメリカが北侵を断行してすぐ、あらかじめ作成されていた筋書きにしたがい、「国連決議案」の草案に捏造した虚構を付け加えて国連に正式に提出することで、謀略の内幕を自らさらけだしてしまった。

Ⅱ　戦争開始と時を同じくしてでっちあげた、「北の奇襲」説と国連における謀略

アメリカは戦争を開始した直後、あらかじめ作成しておいた筋書きにしたがい、国連の名を盗用して恥知らずにも「北の奇襲」説をでっちあげ、それを根拠に米軍の武力干渉を公然と強行し、国連の名でそれを正当化しようと画策した。

1　マッカーサーと李承晩のポケットから出た「北の奇襲」説

朝鮮戦争を引き起こすやいなや、アメリカは戦争を「まったく意外な事変」、「北の奇襲」と印象づけるため権謀術数を尽くした。

1950 年 6 月 25 日の早暁、アメリカの筋書きにしたがい、南朝鮮軍が朝鮮戦争を起こしたということは厳然たる事実である。

しかし、アメリカは、この厳然たる事実の前で戦争犯罪人としての正体を隠し、「北の奇襲」説をもって世界の目を欺こうとした。

彼らはこの策動を、1950 年 6 月 25 日、開戦６時間後に、南朝鮮駐在米大使ムチョーが本国の国務省に送った「最初の報告」によって実現しようとした。

ソウルで開戦の知らせを待っていたムチョーは、傀儡李承晩一味から渡された情報資料をもとに、国務省に送る電文を作成した。

ムチョーが作成した電文には、「韓国軍事顧問団の現地顧問の情報により、部分的に確認された韓国軍の情報によれば、北朝鮮軍は

けさ、数地点において韓国領土に侵入した。……この情報にかんして韓国軍事顧問団や韓国当局と協議したが、攻撃の性質とそのはじまり方からみて、韓国にたいする全面的攻撃であるかのようである」(アメリカの図書『朝鮮戦争の歴史』上　日本語版　125 ページ）と書かれていた。

この電文に表現されているいくつかの曖昧な点は、ムチョーの報告に客観性と公正さが欠けていることを示している。

アメリカの図書『朝鮮戦争——回答のない質問』(13～14 ページ)は、ムチョーの「最初の報告」に対し大きな疑惑を抱いて、次のように評している。

「ムチョー大使の報告は、注意を要するいくつかの問題点を提起している。

第 1 に、それは、間接的で『部分的に確認』された通報にもとづいていることだ。

結果、ムチョーは、分界線情勢についての自己の判断を下せなかった。

第 2 に、その報告が、国防部官吏たちが米軍事顧問団の野戦顧問たちに手渡した情報にもとづいていることだ。

一般のアメリカ官吏が評するように、韓国官吏の信頼性は大いに疑わしいものであった。

第 3 に、米軍事顧問団の野戦顧問は数的に少なく、彼らが、前線での事態発展についての情報を韓国軍のみから得なければならない状況で、彼らが韓国側の通報を確認できたかについては疑わしいところである。

第 4 に、ムチョーの最初の電文にはいくつかの矛盾点があるが、その一つに、彼が『北朝鮮軍は数地点において韓国領土に侵入した』

と書きながらも、『攻撃の性質とそのはじまり方からみて、韓国にたいする全面的攻撃であるかのようである』と、付け加えたことである。

第 5 に、北朝鮮軍が『韓国に侵入した』と断定したあとに、彼はその通報を調査する計画だとして、その主張からいく分後退したようだ。結論的に、ムチョーの報告は、一つの仮説的な報告だった。

にもかかわらず、ワシントンでは、ムチョーの電報文が確定的なものとして取り扱われた」

アメリカが、ムチョーの報告にある「未確認」の断片的な資料を確認しようとせず、「確定的なもの」として取り扱ったのは、「北が南侵した」ということを意図的にでっちあげるのがその本心であったからである。

米国務省に報告されたムチョーの「最初の報告」は、国務長官アチソンの手によって再加工された。アチソンは、待機させておいた国務省の職員（30 名）を動員して、作成ずみの「国連決議案」を考慮しながら、ムチョーの電文を修正加工した。

アチソンは、ムチョーの電文を都合よく切り抜いて「北朝鮮軍が、今日（25 日）の早暁、いくつかの地点から韓国を侵略した」と付け足し、国連駐在アメリカ代表グロスに手渡した。グロスは、就寝中の国連事務総長トリグブ・リーを起こし、アチソンから渡された電文を見せて、国連安保理事会の招集を要求するとともに、準備してきた「決議案」を手渡した。

アメリカの権謀術数と強要によって、国連安保理事会が真夜中の 2 時に招集され、ここで南朝鮮に対する北朝鮮軍の武装攻撃は、平和に対する侵害になると断定する「決議」が採択された。

トルーマンは、この「決議」が国連で「通過」すると歓声をあげ、

この謀略の黒幕であるアチソンをおだてあげる、次のような「祝賀メッセージ」を送った。

「ディーン・アチソン貴下

6 月 24 日と 25 日に関する件ですが、貴下が土曜日の夜、即刻国連安全保障理事会の招集を提案して、私に通知したことは、その後に発生したすべての重要問題と緊密につながる行動でした。もし、貴下が迅速にそのような措置を講じなかったなら、アメリカは、単独で朝鮮戦争に参戦するしかなかったはずです。その後の多くの成果を見るに、貴下は、偉大な国務長官、すぐれた外交官に違いありません。貴下の功績を表彰する意味で、このメッセージを送ります。ハリー・トルーマン」(南朝鮮の図書『中国人の見た韓国戦争』 24 ページ)

それだけでなくトルーマンは、「祝賀メッセージ」を送ったその日の夕刻に、ホワイトハウスで盛大な夕食会を催してアチソンを称賛する茶番劇を演じた。

この「決議」は、共和国とソ連、中国代表の参加なしに、国連憲章に違反して「採択」されたものとして、世界中の非難と嘲笑を浴びた。

アメリカと傀儡李承晩一味が主張した「北の奇襲」説のでたらめさは、朝鮮戦争の開始をじかに指揮したマッカーサーが、北侵の噂の伝播に慌てふためいて「緊急非常会議」を招集したことからしても露見した。

彼らは、朝鮮戦争勃発と時を同じくして「北による南侵」を大々的に宣伝したが、隠すことほど現れるという言葉どおり日本において「韓国が北朝鮮を攻撃した」という事実が暴露されるに至った。これについてアメリカの図書『朝鮮戦争の歴史』上 (日本語版 114

ページ）では、「東京のマクアーサー司令部は、不意をうたれたのだろうか？　世界旅行家で、新聞記者でもあるジョン・ガンサーはそのとき、日本を訪問しており、6 月 25 日の日曜日、妻、ホイットニー将軍、それに二人の総司令部先任将校らとともに、日光にゆく計画だった。一行は、……朝 8 時に出発する予定だった。ところが、マクアーサーにもっともちかい助言者であるホイットニーが、マクアーサーが自分を呼んでいるという理由で、約束をやぶらなければならないことになった。そのほかの連中は日光にでかけたが、ガンサーのことばによると、そこで、占領軍の二人の重要メンバーのうちの一人が、思いがけなく電話によびだされた。かれはかえってきて『大うそは尻がわれてしまった。韓国が、北朝鮮を攻撃したのだ』と、ささやいた」と明かしている。

「韓国が北朝鮮を攻撃した」という噂は、マッカーサー司令部はもちろん、東京市内をはじめ他の都市へと広がっていった。こうして「マッカーサーが李承晩の電話（戦争開始を報告し、支援を要請した電話――編者）を受けたあと、連合軍最高司令部は騒然」となり、「マッカーサー将軍の高位補佐官たちが緊急会議に呼び集められた」（アメリカの図書『朝鮮戦争――回答のない質問』　４６ページ）。

朝鮮戦争勃発と時を同じくして、李承晩とムチョー、アチソン、トルーマン、マッカーサーなどによって「北の奇襲」説がでっちあげられたので、アメリカのある評論家は、「北朝鮮が南朝鮮を攻撃したという 1950 年 6 月 25 日のニュースは、李承晩とマッカーサーのポケットから出た」（アメリカの図書『アメリカ現代史』　日本語版　153 ページ）と、その真相を告発したのである。

「北の奇襲」説が、朝鮮戦争犯罪人であるアメリカの「考案品」

であることは、戦争に先立って秘密裏におこなわれた南朝鮮駐在米軍家族の疎開準備や、アメリカ本土と南朝鮮をはじめ極東地域で朝鮮戦争に関する秘密が漏れ出たことによっても十分立証される。

「戦争のはじまる前に、韓国から疎開する計画があった」（アメリカの図書『朝鮮戦争の歴史』上　日本語版　118 ページ）ことを、米極東軍司令部参謀長ホイットニーが確認している。事実、戦争に先立って米極東軍司令部では、朝鮮戦争計画の一環として、南朝鮮に在留している米軍の家族をはじめアメリカ人を有事の際に撤収させる計画（「『コルラー』作戦という暗号で準備されていた」――日本の図書『朝鮮戦争』第 1 部　文芸春秋　1981 年）が作成されていた。それによると、この作戦には米第 8 軍と米極東空軍及び海軍司令部が参与することになっていた。

戦争に先立って疎開の準備が進められていたことについて、『ニューヨーク・タイムズ』紙（1950 年 6 月 26 日付）は、「……まず指摘すべき点は、朝鮮での攻撃が少しも不意うちでなかったことである。

朝鮮戦争のはじまったあの焼けつくような夏の日、新聞記者たちがペンタゴンとよばれる国防総省の大きなビルに集まったとき、ある副官は『……侵略が不意うちでなかった証拠として、南朝鮮にいた米軍将校、その他の家族をすぐ引き揚げうるように、配船の準備ができていた事実』を指摘した」（アメリカの図書『秘史朝鮮戦争』　日本語版　17 ページ）と暴露している。

朝鮮戦争の始まる前に、その秘密が漏れていたことも公開された。

日本の図書『朝鮮戦争』（洞富雄　24～25 ページ）は、「当時アメリカにいた中国人資本家のグループは、朝鮮戦争の開始期をかなり正確に予知していたようである」と述べ、その証拠として次の二

つをあげた。その一つは、『秘史朝鮮戦争』を発行したマンスリー・レビューの責任者Ｐ・Ｍ・スウィジーが、この本の「発行者の序文」で「朝鮮戦争勃発直前に、51 名のアメリカとその他の海外に住む国民党系の中国人が、アメリカの大豆市場で大々的に大豆を買い占め、3，000 万ドル以上の暴利を得た事実を指摘し、これは、アメリカに住む中国人が、李承晩の計画について事前に通報を受け、その情報を利用して金融上の利益を得ようとしたものだ、と推測した」ということであり、いま一つは、「『チャイナ・ロビー』特集号に『朝鮮戦争の勃発する 2、3 週間前に、華僑がシカゴの貿易市場で 688 万 6，000 ブッシェルの大豆を 1 ブッシェル当たり 2．34 ドルで買い込んだ。……韓国侵入後、価格は 34．5 ドルに跳ねあがった』という記事が載った」ということである。

またこの本に、当時ソウル駐在米大使館員だったコールドウェルとフロストの共著『朝鮮物語』から「イギリスは、イギリス人に対し 3 週間前に、できるだけ身を避けるよう警告していたことを、戦争の始まったその日の夜遅く知った。イギリス大使館には 6 人しかいないのに、戦争の気配をさとったのだ」と引用されているのは、朝鮮戦争の秘密が事前に漏れていたことの例証となる。

アメリカの図書『アメリカ現代史』（日本語版　153 ページ）は、当時資本主義世界のニッケル生産量の 85％を占めていたダレスの「インターナショナル・ニッケル」会社が、1950 年 6 月 25 日の 2 ヵ月前に、ニッケルの価格を 25％も引き上げた事実と、1950 年 3 月から 5 月までの間にアメリカのゴム価格が 50％も跳ねあがり、同年 2・4 半期にアメリカのゴム輸出が戦後最高記録を立てたことを、戦争によって、極東におけるゴムの供給が危機に直面した現象と関連づけて、「ダレスの『インターナショナル・ニッケル』と、

大豆投機業者以外にも、戦争を前もって知っている者たちがいた」と暴露している。

その他にも、日本の図書『朝鮮戦争』(新人物往来社　1973 年　22～23 ページ）では、日本駐屯米第 24 歩兵師団の第 16 連隊が、1950 年 6 月 20 日から戦車輸送船（ＬＳＴ）で本格的な上陸作戦演習をおこない、日本にいる米占領軍が朝鮮戦争直前に、朝鮮語辞典購入騒ぎを起こすなど、ただならぬ動きを見せることにより、戦争が真近に迫っているという予感を日本人に与えた、と評した。また、日本の雑誌『朝鮮研究』(1966 年 6 月号）は、1950 年 6 月中旬、米第 24 歩兵師団の駐屯していた九州小倉基地で、にわかに市内のペンキ業者を総動員して、米軍ジープの軍標識塗り替え作業を昼夜兼行でおこなったのは、戦争を示唆するものであった、と分析している。

2　米軍の武力侵攻を国連の「決議」で隠蔽

傀儡李承晩一味をそそのかして朝鮮戦争を引き起こしたアメリカは、共和国に対する公然たる武力干渉を開始した後、それを国連の「決議」で隠蔽しようとした。

1950 年 6 月 25 日 2 時（アメリカ時間)、国連安保理事会が北侵を「南侵」とした直後トルーマンは、共和国に対する武力侵攻に米軍を投入する計略をめぐらした。6 月 25 日の午後 7 時 40 分（アメリカ時間）過ぎにトルーマンは、国務長官、次官、陸海空軍の長官、統合参謀本部議長、陸軍参謀総長、空軍参謀総長、海軍作戦部長など軍部・政府の首脳陣を急遽迎賓館（ブレアハウス）に呼び集めて、11 時まで武力干渉のための会合を開いた。席上でトルーマンは、「全力をもってこの侵略に対処しなければならないことを、すべて

の人が認めた」(日本の図書『朝鮮戦争』　洞富雄　69 ページ) とし、弾薬の支援と海・空軍の出動を命じた。

同時に、統合参謀本部には朝鮮戦争に米軍を投入すべく命令を準備するよう指示し、米第 7 艦隊にはマッカーサーの指揮下にフィリピンから台湾海峡まで「哨戒」するよう命令した。

トルーマンは 6 月 26 日から 27 日までの夜間 (アメリカ時間で 10 時 17 分)、マッカーサーに、朝鮮で米海・空軍を戦闘に参加させる秘密命令を下した。(日本の図書『日本再登場』　48～49 ページ)

これに先んじて米極東軍司令官マッカーサーは、米軍戦闘機をして 38 度線を越境して北朝鮮のすべての地点を爆撃するよう命令した。この命令はただちに実行に移された。

アメリカ人ペレンバッハの著書『韓国戦争』(76 ページ) には、「その日 (1950 年 6 月 25 日――アメリカ時間) 米第 5 空軍の第 68、第 339 戦闘飛行隊と第 25 戦闘爆撃飛行隊は日本から 163 回出撃した……アメリカはすでに戦争を開始していたのである」と明かしている。

このようにトルーマンは、共和国に対する武力侵攻を公然と開始しながらも、それを 6 月 25 日の国連安保理の決議によるものだと強弁した。

これについてアメリカの新聞『ミネアポリス・タイムズ』(1950 年 7 月 23 日付) が、「トルーマンは自己の行動を正当化するため国連の 6 月 25 日の停戦決議を引用し、『安保理事会は国連のすべての加盟国にこの決議の履行に際してあらゆる援助を提供することを要請した。こうした状況に照らして、わたしは米陸・海・空軍に韓国政府軍に援助と支持を与えることを命令した』と述べた」と指摘しているのは、その真相を暴露したものである。

それゆえ、アメリカの図書『朝鮮戦争は誰が起したか』（日本語版　76〜77 ページ）は、「アメリカ国務省はその『白書』のなかで、6 月 27 日の正午、大統領が『合衆国の空軍および海軍にたいし、韓国政府軍に掩護と支持をあたえよと命令』したのは 6 月 25 日の安保理事会の決議にしたがったものである、と述べている。だが、これは全く事実に反している。すでにみたように 25 日の安保理事会の決議には戦闘行為の停止が要求されているだけで、韓国にたいする援助についての決議が通過したのは 27 日の会議においてである」と明らかにしているのである。

トルーマンは国連の名で武力侵攻を正当化しようとする企図のもとに、不法にも「双方が調停に応じなければならない」との「国連朝鮮委員団」の提案も無視し、6 月 27 日午後 3 時、国連安保理事会を強引に招集し、「武装攻撃を撃退し、その地域での国際的平和と安全の回復に必要な援助を大韓民国に提供することを国連加盟国に勧告する」という「決議」を採択させた。

これについて『ニューヨーク・タイムズ』（1950 年 8 月 26 日付）は、国連駐在ソ連代表マリクの見解を報じて次のように暴露している。

「アメリカ政府は国連の非合法な決議も存在しないうちに、朝鮮人民にたいする武力侵略を開始した。このことは、ほかならぬアメリカ代表オースチン氏によっても確認されている。8 月 10 日、安保理事会でオースチン氏は、アメリカ大統領が 6 月 27 日正午、アメリカ海空軍にたいして韓国政府を援助するよう命じた、と言明した。アメリカ代表はアメリカの不当な朝鮮侵略を隠蔽するためにひらいた安保理で、この非合法な決議をおしつけたが、その会議は、同じ 6 月 27 日の午後 3 時に招集されている。この事実は、公式記録からもまったく明瞭である。したがって、アメリカ政府が安保理

事会招集に数時間さきだって、不法かつ勝手に朝鮮侵略を開始し、こうして、国連と全世界の前に朝鮮侵略の既成事実をもちだしたことは、反論する余地のない歴史的事実である。……

以上にのべたすべての事実からする唯一の論理的結論は、アメリカ合衆国政府が、まず侵略行為をおかし、しかるのちに国連の行動というレッテルをはりつけて、この侵略行為を隠蔽しようと企てたということである」（アメリカの図書『朝鮮戦争の歴史』上　日本語版　203 ページ）

アメリカが国連の名を盗用して朝鮮戦争勃発の責任を共和国になすりつけ、共和国に対する米軍の武力干渉を国連の「決議」で隠蔽し、国連の名で朝鮮戦争を引き起こしたため、フランスの月刊誌『レスプリ』（1950 年 8 月号）は「……アメリカは疑わしいほどの迅速さで国連を利用し、かれらの利己的な利益にあまりにも密着させた決議を捏造した」とアメリカを非難している。アメリカのメディアでさえ、朝鮮でアメリカは国連を隠れみのにして参戦し、その指揮を受け持ったマッカーサーは、国連の白紙委任状をもって米軍司令官の役割を果たしたにすぎない、と公正に評価している。

Ⅲ　戦争の過程で朝鮮戦争勃発の真相を歪曲した謀略行為

戦争の過程で朝鮮人民軍がソウルを解放して押収した信憑性のある機密文書により、アメリカによる朝鮮戦争勃発の真相が明らかになると、彼らは一時口をつぐんでしまった。しかし、1951 年にマッカーサーの後任としてリッジウェイが「国連軍司令官」になった後、彼らは 1951 年 5 月に捏造した「ろ獲した北の文書」を持ち出して「6 ・ 25 南侵」を「立証」しようとし、根も葉もない「戦車南侵」説、「北の先制攻撃によるソウル占領」説などの詭弁を弄して戦争勃発の真相を裏返そうと画策した。

1　ソウルで押収されたアメリカの戦争犯罪文書に対応して考案した「ろ獲した北の文書」

朝鮮人民軍が 1950 年 6 月に反攻撃に転じてソウルで押収したアメリカと傀儡李承晩一味の「北伐」軍事戦略計画図と南朝鮮陸軍情報局 3 課が作成した 1950 年諜報工作計画案（A）をはじめ数多くの報告、書簡などの文書は、アメリカが朝鮮戦争を引き起こしたことを白日のもとにさらけだす告発状となった。

これに泡を食ったアメリカと傀儡李承晩一味は、その「対応策」として「ろ獲した北の文書」なるものをつくりあげた。1951 年 5 月 2 日、国連駐在アメリカ代表オースチンを通じて、国連事務総長トリグブ・リーに送る「特別報告」に「北朝鮮の『偵察命令第 1 号』

と『戦闘命令第 1 号』」なるものを含めて公開する謀略がめぐらされた。

彼らは「問題となった文書は、(1950 年) 6 月 18 日に朝鮮人民軍第 4 師団の参謀長にロシア語で下されたという『偵察命令第 1 号』と、6 月 22 日に第 4 師団長が韓国語で下達した『戦闘命令第 1 号』である。前者は 1950 年 10 月 4 日にソウルで発見され、後者は 7 月におそらく戦場で発見されたのであろう」(南朝鮮の雑誌『新東亜』1990 年 7 月号　448 ページ) とでっちあげた。

アメリカは、これらの「文書」は「1950 年 6 月 25 日、韓国に対して開始した北朝鮮の攻撃」を立証するものだとした。

朝鮮人民軍側が「偵察命令第 1 号」と「戦闘命令第 1 号」の原本を提示するよう求めたのに対し、アメリカは数十年が過ぎた今日まで国連や板門店(パンムンジョム)の会談場にそれを提示できないまま苦しまぎれの弁明を繰り返してきたが、結局、失敗を認めざるをえなかった。

これについてアメリカの歴史学者ブルス・カミングスも「結局、原本は発見されなかった。わたしは、アメリカ政府の諸機関が数年にわたって原本を捜し求めたが、無駄だったという話を二人の記録保管係から聞いた。……高位レベルの認可によって、ようやく機密解除となった韓国戦のもっとも重要な二つの文書は紛失したままである。……

1965 年にそれが偽造文書だと北朝鮮が再び主張したとき、板門店のアメリカ代表は急いで軍史部長に連絡をとったが、彼もやはり見つけ出すことができなかった。彼はその原本を探すためウィロビー将軍に問い合わせた。ウィロビーからは『敵の文書取り扱いはほとんど日常的な作業だ』(同上　448 ページ) との返答があっただけだった」と告白している。

また、「この文書の原本は入手不可能だ。ロシア語原本の複写本にはいかなる官印や署名、あるいは個人的な封印も押されていなかったが、すべてが同一の書体で書かれている。したがってそれは原本を書き写したものに違いない。とにかくその文書は外見だけでは立証できない。文字がロシア語であるのはおかしい。

人民軍将校のうちロシア語で読んだり話したりすることができたのはごく少数であり（大部分の将軍は中国で服務したので中国語を知っていた）、わたしが見た数多くの人民軍からろ獲した文書はすべて韓国語になっていた。……

この文書をもって南韓が何をしたかを知るなら、この文書のもつ説得力は著しく弱まるであろう」（同上　４４９ページ）と評している。

これは、アメリカが「南侵」を立証するために持ち出してきた「ろ獲文書」がすべて偽造文書であることを余すところなく暴露している。

２　「戦車南侵」説と「北の先制攻撃によるソウル占領」説

アメリカは朝鮮人民軍が「先に奇襲攻撃したということは戦争の過程であからさまになった」との論題のもとに、「戦車南侵」説、「北の先制攻撃によるソウル占領」説のごとき詭弁を弄してつっかかってきた。

アメリカは「……１台の戦車もなく押しまくられた軍隊（南朝鮮軍――編者）がソ連製の戦車200余台を先に攻撃したということを信じる者はいない」（南朝鮮の雑誌『週刊韓国』　1990年7月号）と言って「戦車南侵」説を主張した。

この詭弁の本質は、共和国は戦車を持っていたので侵攻者となり、

彼らは戦車を持っていなかったので侵攻者にならないということである。

傀儡李承晩一味は、朝鮮戦争を引き起こす前に、戦車を保有しようと狂奔した。

朝鮮戦争当時、南朝鮮陸軍参謀総長丁一権(チョンイルグォン)の『回想録』によれば、1949 年 10 月に李承晩は、人民軍には戦車があるのに韓国軍にはないと言って、アメリカに戦車の提供を求めたが、「韓国は道路や橋梁の状態が悪いから戦車を送っても役に立たない」と拒まれたとのことである。

にもかかわらず、アメリカが「李承晩に戦車をやると北侵を断行して戦争を起こしかねないのでやらなかった」とか、戦車を持っていた「北が戦車を先に立たせて先制攻撃した」と言うのは戦争勃発の責任を共和国に転嫁するための詭弁にすぎない。

またアメリカは、戦争が始まってから 3 日目に人民軍がソウルを占領した「秘訣」は、「人民軍が日曜日の早暁、国防軍が気をゆるめたすきに、不意に先制攻撃したから」だという論理を持ち出してきた。

これもまた、朝鮮戦争犯罪人の正体を隠蔽するためのでたらめな言辞にすぎない。

朝鮮戦争が勃発して 3 日目にソウルが陥落したのは、アメリカと傀儡李承晩一味が人民軍の戦闘力と戦闘準備を過小評価して挑みかかってきたためである。

1977 年 2 月に米国務省が公開した『アメリカの対外関係』(1950 年　第 7 巻)の「軍事」という表題の「外交機密文書」に、「北朝鮮をソ連、中国との関係においてのみ考察し、独自の思考法と経済的・軍事的潜在力を正しく評価できなかった」と記録されている事

実や、朝鮮戦争当時、米第８軍司令官だったリッジウェイが「遺憾にたえないことではあるが､多大な血の代価を支払わされた原因は、北朝鮮軍の高い戦闘能力を正しく評価できなかったことにあったと考える。戦闘が始まると、司令部は毎日のように必要な兵員数を計算しなおして増やさねばならなかったが、われわれは確かに敵の戦闘力を正しく評価できなかった」（アメリカの図書『朝鮮戦争』 35ページ）と告白している事実は、「北の先制攻撃によるソウル占領」説のでたらめさを実証している。

Ⅳ　停戦後の朝鮮戦争勃発に対するでたらめな「再照明」

アメリカは戦後にも朝鮮戦争勃発の責任を共和国に転嫁するため、戦争の時期に用いていた手口を繰り返し用いる一方、「情報自由法」にもとづく「秘密解除」を通じての「再照明」と、東欧「共産圏」の開放政策を巧妙に利用した「交戦双方間の共同評価」を持ち出し、朝鮮戦争勃発の歴史歪曲策動を執拗につづけた。

1　「情報自由法」にもとづく「秘密解除」

米国務省の「情報自由法」にもとづく「秘密解除」とは、対外極秘情報資料として保管していた文書は25年が過ぎると自動的に「秘密解除」になるということである。

これにもとづき、米国務省は1945年8・15直後の資料と朝鮮戦争期の資料を、1970年代末に「時効」になったとして公開した。

アメリカと南朝鮮はこの「秘密解除」によって朝鮮戦争勃発にかかわる極秘資料が公開されれば、その「真相」を「再照明」することができ、「南侵」を資料的にあばきだすことができるとうそぶいた。

アメリカは、「秘密解除」にした文書のなかには「米国務省外交文書」、「ＣＩＡ報告書」、「米軍がろ獲した文書」、「Ｇ――２報告書」などがあり、その内容は朝鮮戦争の時期にソウル、大田（テジョン）、陜川（ハプチョン）、倭館（ウェグワン）、固城（コソン）、安東（アンドン）、平壌（ピョンヤン）、咸興（ハムフン）、元山（ウォンサン）など七百余ヵ所でろ獲した「北朝鮮文書」にもとづいたものだとした。

この「ろ獲文書」は、東京にある米極東軍司令部本部所属の翻訳解説部 8236 部隊に集結され、そこで秘密文書として類別され、1951 年 11 月にバージニア州アレクサンドリアの米連邦文書庫「蔵軍付属室」の文書課に送付されたという。

1951 年に「蔵軍付属室」の文書課が廃止されると、「ろ獲文書」は米連邦政府総務処管下の国立文書室一般文書課に移され、1977 年にそれを再検討し「極秘」とされるものは「安保」、「国家戦略的次元」という理由で伏せられ、歪曲宣伝に有利な文書だけが「秘密解除」になった。

現在、これらの文書はワシントンの国立記録保管所に保管され、特定の研究者に限って部分的な閲覧が許されているという。文書の総量は 161 万ページに及ぶとのことである。

これには国家の公式文書、報告書、内部講演資料、要人の履歴書、作戦計画が示されている軍用地図、写真、新聞、雑誌のコピーなどが含まれているという。

アメリカは、これらの文書が「秘密解除」になったので朝鮮戦争史の研究において「空白」となっていた「暗がり」、「不透明な個所」が埋め合わされると言って、『中央日報』、『東亜日報』をはじめ南朝鮮の主要新聞に朝鮮戦争「再照明」の欄を設けて共和国に言いがかりをつける一方、「集中研究」の名目でワシントン大学やコロンビア大学など、アメリカの各大学まで動員して朝鮮戦争勃発の真相を歪曲しようと画策した。コロンビア大学で「秘密解除」になった「ろ獲文書」にもとづく初の研究報告が『解放された朝鮮の政治』という題名で出版されたが、その図書でもやはり「南侵」説を立証することはできなかった。それから長い歳月を経ているが、いまなおアメリカは「南侵」宣伝に利用できるこれといった資料を一つと

して提示できずにいる。
事実上、「北の有罪」を立証できる「文書」があったなら、アメリカが「情報自由法」にはかかわりなくすでに数十年前にそれを公開していたはずであることは言を俟たない。
結局、アメリカは「秘密解除」を朝鮮戦争犯罪人としての正体を隠すことに利用しようとしたが、そのでたらめさをいっそう明白にさらけだす結果をまねいただけである。

2 「交戦双方間の共同評価」の内幕

1980 年代の後半に入って、旧ソ連をはじめ東欧社会主義諸国で改革、開放が実施されると、それを機にアメリカは、帝国主義の手先に転落した修正主義者、改良主義者や民族を裏切った一部の在ソ朝鮮人を買収、利用し、「交戦双方間の共同評価」なるものを持ち出して朝鮮戦争勃発の真相を歪めようとした。
アメリカは、朝鮮戦争が法的に終結していない状態では交戦双方が互いに自分に有利に評価するため、1980 年代の前半までは朝鮮戦争勃発の問題を解明することができなかったが、その後、旧ソ連が保管していた朝鮮戦争関係の資料が公開されたので、「交戦双方間の共同評価」によって朝鮮戦争を起こしたのが誰であるかを正確に解明できるようになったと宣伝した。
アメリカは「開放に乗り出したソ連も事実どおり口を開き、朝鮮戦争の資料が公開されたので、北侵説の虚構があからさまになった」と内外に宣伝した。また、「朝鮮戦争についてこれまでは西側の一方的な資料と主張によって説得力に欠けていたが、共産圏の開放政策により、遠からず交戦双方間の共同評価によって大きく修正、

補完されることが期待される」(南朝鮮の新聞『東亜日報』 1990年 6 月 24 日付)とし、朝鮮戦争勃発の真相を隠すために手段と方法を選ばなかった。

南朝鮮は旧ソ連の学者を買収、招請して朝鮮戦争に関する学術発表会、研究討論会などを開き、朝鮮戦争にかかわる「新たな資料」を提示させる一方、でっちあげた朝鮮戦争関係の「新たな資料」を彼らに渡してそれを「公開」させた。

代表的な例として、旧ソ連国防省直属の軍事歴史研究所所長であったボルコゴノフを買収し、共和国に難くせをつける「新たな資料」を「公開」させた。南朝鮮は御用教授を使って 1987 年に開かれた「フィンランド軍事学会討論会」に参加したボルコゴノフと接触させ、買収した。アメリカと南朝鮮に教唆されたボルコゴノフは『朝鮮戦争白書』を書いて「南侵」を証明しようとした。

彼によれば、スターリンは共産主義の「拡張」と「膨張」のためにヨーロッパでは「西進」政策を追求する一方、アジアでは中国革命を支援するとともに、朝鮮半島において共産主義の「南下」を追求したが、その結果、朝鮮で戦争が起きたというのである。彼は正確な根拠となる資料は提示できず、「1950 年 2 月に朝鮮民主主義人民共和国の政府代表団がソ連を公式親善訪問し、長期滞留してスターリンと数回にわたり会談した記録映画のフィルムが保存されているが……そのとき、朝鮮戦争の問題が討議された」との推測を述べている。

アメリカと南朝鮮の筋書きにしたがったボルコゴノフの主張は、説得力のないものであったため、発表されるやいなや学界はもちろん、社会各界の非難と嘲笑、揶揄を浴びた。

第 2 次大戦における対日戦争当時、朝鮮半島の南端まで容易に進

出できる機会さえ利用しなかったソ連が、朝鮮で「共産圏」を拡張しようとしたというのはこじつけもはなはだしい。1950 年前後の時期、旧ソ連はアメリカと戦うことを望まず、できるだけアメリカの戦争策動に巻き込まれないようにして国内問題の解決に力を注ぎ、朝鮮戦争の時期には北朝鮮への支援もためらったということは周知の事実である。アメリカと南朝鮮は「交戦双方間の共同評価」に、朝鮮戦争当時、共和国の一定の職責にあって戦後、ソ連に亡命した朝鮮人も利用した。

代表的な例として、ソ連に亡命した李相朝を買収してソウルに連れ込み、あたかも朝鮮戦争勃発歴史の証言者のように押し立て、虚言を並べさせた。記者会見に臨んだ李相朝が中国人民義勇軍の参戦問題について長々と並べたてると、南朝鮮は御用記者を利用して朝鮮戦争勃発に関する具体的な事実を話すよう求めた。

しかし李相朝が、当時自分は人民軍の副総参謀長を務めてはいたが、作戦系統には従事していなかったので、よく分からないと言ったため、南朝鮮は元も取れなくなってしまったばかりでなく、かえって南朝鮮社会の言論界から、聞き取りも満足にできず、精神状態もはっきりしないうすのろまで反共宣伝に利用していると非難される結果になった。

アメリカと南朝鮮は、朝鮮戦争当時共和国政府の内務省副相を務めた姜相虎も見つけ出し、南朝鮮に連れていって謀略的な策動をめぐらしたが、それも徒労に終らざるをえなかった。金浦空港に降り立った姜相虎は機関要員に言いふくめられたとおり「6 ・ 25 は南侵であったという歴史的事実を証言するためにやってきた」と大口を叩いたが、その後の記者会見で証拠らしき資料を何一つ出すことができなかった。

南朝鮮は姜相虎をソウルに連れ込むときに、朝鮮戦争に関与したという 18 名の在ソ朝鮮人も一緒に連れていき、朝鮮戦争に関する資料を「公開」させたが、その謀略も成功しなかった。1990 年 6 月 19 日付の『ソウル新聞』が「元北韓公務員、学者、将軍など要職にあった在ソ同胞らをソウルに誘い込んで歓迎し、優待しながら 6 ・ 25 当時の秘話を公開、証言するよう求めたが、価値のある資料は得られなかった」と書いているが、これはアメリカの「交戦双方間の共同評価」による朝鮮戦争勃発の真相歪曲策動が失敗したことを示す事例の一つである。

Ⅴ　冷戦終結後さらにはなはだしくなった朝鮮戦争勃発の歴史「裏返し」策動

アメリカは冷戦終結後、国際情勢の「有利さ」に乗じて朝鮮戦争勃発の歴史を「裏返し」する策動をめぐらした。

アメリカが唱えた朝鮮戦争勃発の歴史「裏返し」とは、彼らの利益にかなうよう朝鮮戦争勃発の真相を裏返しにすることを意味する。

アメリカのこの歴史「裏返し」策動の裏には、冷戦終結の好機に乗じて朝鮮戦争勃発の責任を共和国になすりつけ、共和国を「戦犯国」に仕立て上げて孤立させ圧殺しようという凶悪な下心がある。

こうした企図からアメリカと南朝鮮は冷戦終結後、朝鮮戦争勃発の歴史「裏返し」策動を重要な課題とし、「大統領」をはじめ高位級の人物と日本軍国主義者をはじめ「同盟国」、「追随諸国」及び崩壊した旧ソ連まで利用してその幅と度合いを強めた。

そしてその効きめを強めるため、共和国に対する孤立・圧殺策動を悪辣に進めた。

1　エリツィン政府との結託による朝鮮戦争勃発の歴史「裏返し」策動

アメリカと南朝鮮は冷戦の終結を機に、エリツィン政府と結託して朝鮮戦争勃発の歴史を歪曲することに注目を向けた。

彼らは、これまでの朝鮮戦争の歴史は、東西冷戦の影響を受けて公正に叙述されていないから裏返すべきだとし、これに朝鮮戦争と

かかわりの深いロシアを引き入れて利用することにした。

アメリカの差し金のもとに南朝鮮は 1990 年代の前半に、エリツィン政府にいくばくかの金をつかませて、朝鮮戦争にかかわる秘密資料の提供を求めた。エリツィン当局がこれに応ずる気配を見せると、南朝鮮は得たりとばかりに大統領をはじめ外交官、安企部要員、御用学者まで動員して、ロシア当局から関連資料を手に入れようとした。

1992 年 11 月、金泳三(キム ヨン サム)はエリツィンを南朝鮮に招き、「経済借款」を与える代価の一部として朝鮮戦争に関する秘密文書の提供を求めた。

南朝鮮国会で、「6 ・ 25 文書」を探して提供するとエリツィンが約束した後、金泳三は 1994 年 6 月にモスクワに出向き、朝鮮戦争前と戦争期間に共和国外務省と旧ソ連外務省との間に取り交わされたという「電文」、「面談録」などの外交文書や旧ソ連共産党中央委員会の会議録などの内部文書を含め、計 216 件、545 ページに達する資料をエリツィンから受け取った。

金泳三はこれらの文書が、「6 ・ 25 が北の奇襲、南侵によるものだったという歴史的事実を詳細に明らかにする」であろう、とうそぶいた。

そして『ソウル新聞』、『中央日報』、『東亜日報』などの南朝鮮の新聞を利用して「ロシアも事実どおりに口を開くことになった」、「韓国戦起源論争の真実が明らかになるであろう」、「北侵説の虚構があばかれ、南侵説が既定事実化されることになった」などとデマ宣伝をおこなった。

ところが彼らはエリツィンから提供された「6 ・ 25 文書」をいくら調べても、「南侵」説を裏付けるこれといった資料を見つけることができなかった。こうなると彼らは、「当時ソ連と北の間に外

交文書がしきりに取り交わされたということ自体が 6 ・ 25 戦争準備のためのもの」だの、「直接的な言及はないが、さまざまな資料から類推すると、6 ・ 25 が南侵だったということが示唆される」だのと、内容を自分勝手に憶測したり歪曲する卑劣なペテン行為に取りすがった。

1994 年 5 月にロシア国営のオスタンキノＴＶ放送社が製作、放映した『党中央委員会の秘密、朝鮮戦争』というビデオテープはその実例である。

モスクワ・クレムリン文書保管所で発掘された朝鮮戦争に関する資料にもとづいて製作したというこのビデオテープは、朝鮮戦争勃発の歴史を途方もなく歪曲し、朝鮮戦争があたかも「北の南侵」によって起きたかのように描写している。

このビデオテープは題目から内容に至るまで、すべてがとてつもない捏造品であったため、公開されるやいなや学界や社会各界の疑惑と非難を買った。

ビデオテープの製作担当者であるボルコゴノフは、そのビデオテープが誰も見られなかった秘密文書保管所に自分が直接入って発掘した資料にもとづいたものだと弁明した。

彼の言葉はさらに大きな疑惑を呼び起こした。

ロシアの歴史学博士ゼニーキンをはじめ多くの学者は、誰も見ることができなかった党中央委員会の秘密資料をボルコゴノフだけが見たというのは納得しがたい、と資料の信憑性に疑問を呈した。ゼニーキンは 1994 年 5 月 31 日付の『プラウダ』紙に寄稿した文章で、ボルコゴノフが「自分だけ知る秘密文書」を「独占取材」したというのは「非良心的なこと」だと非難し、ロシア科学アカデミー東方学研究所の朝鮮課長ワーニンは、誰一人見られない秘密資料をボル

コゴノフだけが独占して利用することができたという状況は理解できないと指摘した。そして専門家の公開的な討論を経た厳正な学術的検討もないまま、資料に対する自分勝手な引用と解釈によって「北朝鮮を戦争犯罪集団」と決めつけるのは学問的な態度というより悪意にみちた扇動行為にすぎないと非難した。（南朝鮮の雑誌『ハンギョレ21』付録）

結局「ビデオテープ」のでたらめさはあばかれた。

こうして南朝鮮は、ロシア外務省の官吏や学者たちから面責と非難を受けた。

1994 年 10 月、モスクワで南朝鮮の「外交安保研究院」とロシアの世界経済及び国際関係研究所の共催による「国際学術会議」に参加したロシア外務省次官パーノフと極東問題研究所所長チタレンコは、南朝鮮が「6 ・ 25 文書を公開してロシアまで外交的苦境」に陥れたとして、「6 ・ 25 が北の南侵」によって起きたという南朝鮮の主張を否定した。パーノフは基調演説で、「6 ・ 25 の開戦直前に、南北間には大小の武力衝突が頻繁に起きていた。正直なところ北の『南侵』と断定するのは難しい」と言って「南侵」説を一蹴した。

ロシアの外交官吏や学者たちが「6 ・ 25 文書」の公開そのものを問題視したのは、もともと南朝鮮に「6 ・ 25 文書」を渡す際、共和国及び中国との関係を考慮して公開しないよう求めていたためである。エリツィンは 1993 年 6 月にモスクワを訪れた元安企部部長の韓昇柱（ハンスンジュ）に「6 ・ 25 文書」の目録を手渡す際に内容を性急に公開しないよう念を押したとのことである。『ソウル新聞』（1993 年 6 月 25 日付）はそれについて次のように報じている。「政府は『ロシアの要請』により、『6 ・ 25 文書』を受け取ったという事実の外は内容を一切秘密に付している。

外務長官も『内容を先ばしって明かさない方が韓・ロ両国関係に役立つ』ときわめて用心深く対応している。

韓昇柱がエリツィンから目録を受け取って自ら保管し、帰国後、単独で金泳三に報告したのもこのためである」

エリツィン当局が文書の内容を性急に公開しないように望んだのは、その文書に何か内容があったからというよりは、第3国と関係する外交機密文書を売り渡したこと自体に気がとがめたからである。

それにもかかわらず、南朝鮮はそれを性急に公開したばかりでなく、その文書から自分たちの期待した資料を見つけることができなくなると、事実を勝手に憶測し誇張したことでエリツィンを苦境に陥れたのである。これらの事実は、アメリカと南朝鮮のエリツィン当局との結託による朝鮮戦争勃発の歴史「裏返し」策動が失敗したことを示している。

２　日本軍国主義者を利用しての朝鮮戦争勃発の歴史「裏返し」策動

冷戦の時期、日本軍国主義者は朝鮮戦争について公式的な見解の表明を避け、自分たちの朝鮮戦争参戦の事実が放送や出版物によって漏れないよう徹底した報道管制を布いた。

さらに彼らは朝鮮戦争で死亡した者に対する公式の評価や年金の支給もできず、その遺家族に五千ドルの慰謝料を払って「秘密順守」を強要した。

国際法に照らして日本の朝鮮戦争参戦を問題にすれば、賠償や処刑を免れないことは明らかであるため、日本軍国主義者は冷戦当時には朝鮮戦争の有益性を宣伝する程度でしか関与できなかった。

冷戦が終結すると彼らはアメリカの庇護のもとに自己の本性をさらけだし、アメリカによる朝鮮戦争勃発の歴史「裏返し」策動に加担する挙に出た。

日本軍国主義者がでっちあげた代表的な虚説の一つは「朝鮮戦争はマッカーサーの大謀略に北朝鮮の小謀略が巻き込まれた戦争」という詭弁である。

日本の反動的な御用史家である萩原は、雑誌『文芸春秋』に寄せた文章で、「もともと朝鮮戦争は米極東軍司令官であったマッカーサーが世界戦略の次元で準備したものであるが、戦争を起こす口実を見つけようとしていた矢先、北朝鮮が『南朝鮮解放』を熱望し、焦って事を起こしたので朝鮮戦争勃発の責任を北朝鮮が負うことになった」とした。そして「北朝鮮がマッカーサーに乗せられた」だの、「マッカーサーの落とし穴にはまった」だのと歪曲した。

萩原はこのような反動的虚説の妥当性を論証するため、中国で共産党が蒋介石の国民党を本土から駆逐したことに「北朝鮮が刺激を受けかねなかった」だの、そのため南朝鮮を解放して統一するための「南侵計画」を急いだだの、東京にいたマッカーサーは「北朝鮮の情報をウィロビーの情報部隊の報告によってすべて知っていたが、知らぬふりをしていた」だのと捏造した(南朝鮮の雑誌『マル』 1994年6月号)。

萩原のこの筋書きは、アメリカの差し金によってつくりあげられた「南侵」説の衣替えにすぎない。

事実上、共和国はアメリカが朝鮮戦争を準備していることをことごとく知っていたし、それを傍観することなくアメリカの一挙一動を鋭く注視しながら、戦争に対処すべく必要な準備を整えた。そのため、共和国は傀儡李承晩一味の不意の侵攻を即時挫折させ、反撃

に転ずることができたのである。事実がこうであるにもかかわらず、冷戦終結後、日本軍国主義者がアメリカの朝鮮戦争勃発の歴史歪曲策動に加担して朝鮮戦争勃発の歴史「裏返し」に一役買って出たのは、朝鮮戦争に参加して犯した侵略行為を覆い隠し、共和国に対する孤立・圧殺と再侵略に有利な状況をつくりだすためである。

3　対共和国孤立・圧殺策動に便乗した断末魔的な朝鮮戦争勃発の歴史「裏返し」策動

1990 年代初の湾岸戦争以後、アメリカは朝鮮戦争勃発の歴史歪曲策動を軍事的圧殺策動と結合していっそう悪辣に展開しはじめた。

アメリカは国際原子力機関の不穏勢力と野合して「核脅威」をつくりあげ、共和国に原子爆弾を出せと途方もない要求をつきつけて孤立・圧殺策動に踏み出した。

これに対し共和国が強硬な対決姿勢をとると、アメリカは軍事的「制裁」を云々し、国防長官ペリーをＮＢＣテレビ番組に出演させ、「北朝鮮に対する先制攻撃は一つの選択案となっている」という傲慢きわまる好戦的な暴言を吐かせた。

これとともにアメリカは 6 隻の航空母艦、34 個の戦闘飛行隊、4 個の爆撃飛行隊、11 個の陸軍部隊 50 万を投入して共和国を攻撃する作戦計画まで立て、第 2 の朝鮮戦争を開始する機会をうかがっていた。

南朝鮮はアメリカの孤立・圧殺策動に呼応して、北が 1950 年代にソ連製戦車を持って不意に南侵したように、今日は核兵器を開発して同族に核の惨禍を被らせようとしている、とヒステリックなデマ攻勢を展開しながら、アメリカに「先制攻撃」を要請した。同時

に彼らは、アメリカにそそのかされ、特攻隊を派遣して共和国の原子力発電所を破壊するとまで放言した。さらに彼らはマスメディアを総動員して、1950 年代に「人民軍の戦車南侵」によって「漢江の人道橋が修羅場」と化したかのように想起させながら、核爆弾を搭載した爆撃機が今にも軍事境界線を越えてくるかのようにわめき立てた。

こうした状況について南朝鮮の雑誌『マル』(1994 年 4 月号) は「『核脅威』騒ぎで住民は神経衰弱にかかり、気が転倒している」と伝えている。

共和国がいかなる孤立・圧殺策動にも微動だにしないのを見てとったアメリカと南朝鮮は最近、さらに狡猾な「宥和政策」をとる一方、「北朝鮮の 50 年代の対米挑戦」を云々して新たな戦争準備に熱を上げている。

ボイス・オブ・アメリカ (1998 年 1 月 13 日) によるとアメリカは、「50 年代にアメリカに挑んだのも共産北朝鮮であったが、今日アメリカの新秩序確立に挑戦するもっとも危険な勢力も共産北朝鮮であり……アメリカの頭上に核爆弾を浴びせる唯一の敵も北朝鮮軍である」とし、1990 年代末期に共和国を軍事的に圧殺するために手段と方法を選ばなかった。

共和国が 1998 年 8 月に人工衛星「光明星 1 号」の打ち上げに成功したとき、アメリカとその追随勢力は 6 ・ 25 朝鮮戦争勃発当時に唱えた「南侵奇襲」説の模写版である「北のミサイル脅威」を持ち出して情勢をいっそう緊張させ、共和国を孤立・圧殺するための策動に熱を上げた。

1999 年 6 月、アメリカと南朝鮮は、朝鮮西海の「北方限界線」を持ち出してそれを正当化しようと、南朝鮮海軍を動員して故意に

「西海事件」を引き起こし、その後、南朝鮮とその周辺で戦争演習の頻度を高め、南朝鮮占領米軍と南朝鮮軍を増強して情勢を緊張させた。そして「西海事件」の責任を共和国に転嫁する卑劣な行為まで働いた。

この「西海事件」について南朝鮮のある判事が、西海上での武装衝突事件は南朝鮮海軍の意図的で冒険じみた挑発によって起こったという文章をインターネットで流すと、泡を食った南朝鮮当局は彼を捜査する騒ぎまで起こした。

アメリカと南朝鮮は「西海事件」を起こした後、「北の軍事的脅威」と「予測不可能な挑発可能性」についてさらに喧伝し、極端な北侵策動を繰り広げている。彼らは共和国を標的にした 1，000 余個の核兵器を南朝鮮に配備した状態で、北侵のための「ＯＰ5027――98」を立て、朝鮮半島での「全面戦争」の際、膨大な米軍兵力を緊急投入する対策と、日本をはじめ追随諸国の兵力を引き入れる策略をめぐらしており、各種の合同軍事演習や南朝鮮占領米軍家族の退避訓練までおこないながら、先制攻撃にひとしい暴言まであえてしている。

このようにアメリカとその追随勢力の共和国に対する軍事的圧殺策動がさらに露骨化しているなかでとくに注目されるのは、その効果を高める目的でさらに強まっている朝鮮戦争勃発の歴史「裏返し」策動である。

アメリカと南朝鮮は 2000 年 6 月の朝鮮戦争勃発 50 周年にちなんで、莫大な資金と人員を動員して、2003 年までの 3 年間、朝鮮戦争勃発をはじめ軍事関係の歴史を歪曲宣伝する策動を集中的かつ広範におこなおうと画策している。

アメリカの差し金で南朝鮮は、朝鮮戦争勃発 50 周年を控えて、

アメリカと南朝鮮政界の上層部まで参加させる「行事」を大々的におこなうことにし、1998 年に「準備委員会」を組織して予算まで編成した。

南朝鮮は 2000 年度に朝鮮戦争「50 周年記念行事」を鳴り物入りで宣伝し、「造形物」の建立、「再照明された戦争史」の編纂、朝鮮戦争に参戦した数万人の米軍と追随諸国雇用兵のための「記念式」、「歓迎パーティー」、「記念メダル」の授与、「国連軍」の墓地参り、「市街パレード」、「仁川上陸作戦の再演」などを企画し、6 ・ 15 北南共同宣言が発表された後も「仁川上陸作戦 50 周年記念行事」などさまざまな「戦闘記念行事」や「記念館、銅像の建立行事」をおこなうなどして、朝鮮戦争の歴史歪曲策動をつづけた。

これは、アメリカと南朝鮮が朝鮮戦争を開始する前から始めた朝鮮戦争勃発の歴史歪曲策動を対共和国孤立・圧殺策動に便乗して、最終的段階でおこなおうとしていることを示している。

結びのことば

朝鮮戦争を引き起こした責任を免れようとするアメリカとその追随勢力の卑劣かつ執拗な謀略策動を世界の面前にあばきだすことは、朝鮮半島においてのみでなく世界的規模でアメリカの侵略と戦争策動を阻止、破綻させ、平和を守るうえで意義が大きい。

世界の心あるジャーナリストはアメリカの朝鮮戦争勃発の歴史歪曲策動の内幕を明確に知り、それを粉砕するための闘争を繰り広げるべきである。

こうして朝鮮戦争を引き起こした戦犯であるアメリカとその追随勢力にこれ以上詭弁を弄する余地を与えないようにし、彼らを歴史の峻厳な審判場に引き出して法的責任を負わせるべきである。

外国文出版社

チュチェ 92（2003）